

〔魚鑑下〕こひ〇中　此魚江河池水共に産す。金鱗紫鬣紅肉なり。長流淡水に生するものを上とす。大湖これに次ぐ。池沼のもの劣れり。山城淀川第一たり。就中車下くるまじだと稱するもの絶品にして、尋常に指を染ること能はず。江都利根川も亦美し。

〔雍州府志六土產〕鯉魚 所々有之。其中淀橋下所產爲勝。是稱淀鯉。嗟。峨。大。井。川。中深淵所有味美。近江。湖水之所出又爲宜。

〔古今和歌六帖三〕こひ

淀河の底にすまねどこひといへばすべていをこそねられざりけれ

〔新撰六帖三〕こひ

淀川にいけてつなげることひをみよ。誰も此世はあはれいつまで

〔皇都午睡三編下〕或人招請せられて行しに、鯉の差身を出すかの客賞味して云ふ。亭主の饗應至て深切なり。此鯉は淀の鯉なりと思ふ。遠路の珍物一入辱なしと云。亭主客をもふけて何の馳走なし。是一種の馳走也。玄かし客早く淀の鯉の味知ること不思議なりと云ふ。客曰。淀の鯉に一つの替りあり。外の鯉は煎酒に入て賞味するに。煎酒濁る也。淀の鯉は幾度入ても濁ることなしと答ふ。諸人其博識を感じ。評に曰。鯉を籠に入。早瀬川に一夜置て調味すれば。泥を吐き清く成ゆ。煎酒濁ることなしと。爰を以て發明せり。淀川早瀬川なるゆゑ。流に住魚うちに泥を貯へざるゆゑ。其汁濁らずといふ。

〔遠碧軒記一神祇〕上賀茂元日神前に、元日の御供を御棚にかざりて色々の供物あり。近江の安曇川より鯉を上る。今に其通なり。

〔續江戸砂子一〕江府名產并近在近國
淺草川紫鯉 駒形堂花川戸の邊也。此鯉色金紫也。山州淀川の鯉より勝れたりとす。